

絶滅危惧種アサクサノリ

菊 地 則 雄

紙状の乾海苔の原料は、紅藻類のアマノリ類（以下、ノリ）です。その中でも特に名前の知られているものは「あさくさのり」でしょう。ノリの養殖は江戸時代に東京湾などで始められたとされていますが、養殖された乾海苔製品は「浅草海苔」の名で親しまれました。浅草でノリが採れたから、採れたノリを浅草で乾海苔に加工したから、浅草の門前市で売られたからなど、その名の由来にはいくつか説がありますが、明治時代になって、原料となるノリの種類に「アサクサノリ」の名が付けられました。アサクサノリは東京湾のような内湾の干潟に生育し、そこで養殖されてきましたが、埋立や干拓などが進み、生育地である干潟が消滅していったのと併せて、姿を見せなくなりました。またノリ養殖対象種が、色が黒くて良い製品となる近縁のスサビノリに変わっていったことも、減少の要因のひとつとされています。そして1990年代前半には、日本全国でたった4カ所しか生育地が知られていない状態にまでなってしまう、「絶滅危惧種」とされたのです。

しかし本当に全国で4カ所しか生育地がないのか？本格的に調査する必要があるということで、1998年からアサクサノリの生育地を探す調査が始まり、ちょうどその頃、千葉県立中央博物館（以下、中央博）に奉職した筆者も、ノリを専門に研究している人間として調査に参加するように要請され、それ以後20年以上、アサクサノリの生育地調査に携わってきました。

中央博分館海の博物館（以下、海博）が開館したのが1999年3月。海博に移った筆者は、アサクサノリの生育地調査を継続し、少しずつ新たな生育地を発見していきました。そして、絶滅したと言われていた東京湾でアサクサノリを再発見したのが2004年。慎重に種類の査定を行い、本当に定着しているのかどうかを数年にわたって確認した上で、テレビ・新聞等で再発見が報道されたのが2006年2月。その年の暮れには、海博で企画展示「マリンサイエンスギャラリー アサクサノリ—ノリの自然誌—」を開催し、アサクサノリの現状を多くの人に知っていただく機会を持つことができました。

その後は、他機関の共同研究者とともに、全国各地のアサクサノリの遺伝的な特徴や、スサビノリとの交雑種の出

現状況なども調べてきました。そして、2006年の段階では未発見だった千葉県内でも、浦安市の旧江戸川河口、外房の一宮川河口、それに九十九里の南白亀川河口の3カ所でアサクサノリを確認することができました。

近年では、アサクサノリが出現する季節は何か、潮間帯のどのあたりに着くのか、どのようなところにたくさん生えるのかなど、天然のアサクサノリが、どのような環境でどのような生活を送っているのかについて、少し詳しく調査を行なっています。食用となるノリは「葉状体」という葉のような体で、アサクサノリやスサビノリでは、晩秋から初春に生えます。冬がとても寒い年は、アサクサノリの葉状体がたくさん、しかも大きくなることを経験的に感じていましたが、本当にそうなのか？とっていました。しかし数年間にわたって調べてみると、そういう単純なものでもなく、ノリが生え始める10月頃の気温・水温などによっても、その年の生育量に大きな影響が出る可能性があることがわかってきました。このような基礎的な知見は、絶滅危惧種アサクサノリを守っていくためにはとても重要なものなのですが、実はこれまでほとんど研究されていなかったのです。まだほんのわずかな進歩でしかありませんが、そのようなデータが得られてきたのは幸いでした。

海博では、このような海の生きものに関する地味ながらも重要な基礎データを継続的に収集し、研究してきています。この業務は基本的に未来永劫継続していくものです。私も、アサクサノリ調査を少しずつでも継続し、絶滅危惧種アサクサノリの保全に役立てられるようにしていきたいと考えています。

(分館海の博物館)



外房・一宮川河口のアサクサノリ（左）とその標本（右）